

3. 1 1 の教訓

山下第二小学校

校長 渡辺 孝男

1 はじめに

3月11日の東日本大震災。これほどの大地震をだれが予想していたであろう。99%の確率で予想されていた宮城県沖地震でも、これほどの津波までが来るとはだれも思っただけではなかった。

そしてそれは突然やってきた。

学校としての危機管理体制を根底から揺さぶる、そして即座に対応しなければならない状況での学校管理・児童管理というものを改めて考えさせられる瞬間が訪れたのだった。

その時点で、そこにいたすべての人々が互いの命を守るために、最大限の力を注いだ。

その過程を忠実に記録することで、今回の震災・津波への対応について改めて考えたい。そして、仮に今後同様の災害が起きたときにも、最低限の被害に食い止められるよう、参考にさせていただくことを願い、本稿を書き進めていきたいと考える。

2 地震前日までの日常

(1) 山下第二小学校の概況

亘理郡山元町高瀬字古谷地1。これが学校の所在地である。山元町は、宮城県の湘南と呼ばれ、冬でも暖かい日が多い、と言われる。周りには、イチゴのビニールハウスや田畑が広がっており、のんびりとした農村地帯である。広々とした校庭に、一目見るとまるで美術館のような外観のモダンな校舎。それが山下第二小学校であった。

太平洋とは300mほどしか離れていないのに、松林(幅約200m)と高い防波堤(高さ6.2m)で海はほとんど見えない。そのため、波の音は聞こえるものの、ことさらに海の近くということ意識することもなく、

夏に吹いてくる涼しげな海風だけが爽やかな、そんな学校だった。

(2) 山下第二小学校での日常

全校児童202名、教職員20名という構成であり、学級は9クラス。4年生だけが2クラスで特別支援学級が2つという学級編制である。

校舎は建築後20年ほど経ってはいたが、校舎中央に吹き抜けの透明ドームがあり、その下は多目的の空間として様々な用途に使っていた。明るく広々とした空間は、子どもたちの精神衛生上もすこぶるよい環境を作り出していた。

また、伝統的に地域とのつながりが強く、総合的な学習の時間や生活科の学習などで地域の数多くの方々が学校に出入りしていた。年度当初に学校で使用する畑を耕しにきてくれたり、校地内の階段を修理に来てくださる保護者の方がいたり、とにかく地域に支えられているということがいつも実感できる学校であったと思う。

3 3月11日の出来事

(1) 突然の揺れに対して

この日、3月11日は午前中に中学校の卒業式が実施される日でもあった。また、風邪が流行っており、教員1名が年休、子ども2名が欠席していた。さらに、卒業を目前にして、6年生が卒業記念に奉仕作業として、5校時目に校内清掃をしていた。そんなありふれた日の午後だった。ほとんどの子どもたちは学校にいたのだが、2年生だけは「さようなら」を終えて、下校させた直後だった。

午後2時46分、突然の大きな揺れが学校を襲った。

あまりの揺れの大きさに、校長室にいた私も立っていることができなかった。すぐに隣の職員室に移動したが、教頭も教務主任も当然動ける状態ではない。それでも、すぐに教

頭が緊急放送のマイクをつかみ、「今、大きな地震が起きています。落ち着いて机の下にもぐりなさい。」と放送を入れた。校内からは、いろいろな物がぶつかったり倒れたりしている音が聞こえてくる。みんながとにかく、自分の体を守るのに必死であった。

【担任たちの証言】

- ・揺れが大きくなったとき、棚上に備えてあったミニコンポとDVDプレーヤーが落ちて一部砕けた。声を上げて泣く子や「こわい」などと叫ぶ子もいたが、担任として、子どもたちを守るために次に何をすべきかを考え続けた。
- ・子どもたちは机の下にすぐにもぐった。数名は泣いていた。



教頭がすぐに教育委員会に電話をしようとしたが、つながらない。テレビをつけたら、「東北地方で大地震が起きました。大きな揺れです。大津波警報が出されました。…」などの声が聞こえてくる。ただ、画面も大きく揺れ、画像もはっきりとはしなかった。

そのうち、一時揺れが収まりかけたが、再度揺れ始め、自分の感覚では15分以上も揺れが続いたように思っていた。

もちろん、その間、職員室から動くことはできなかった。

しばらくして揺れが収まってきた頃、私と

教頭とが目で合図をし、「まず、校庭に避難させましょう。」ということを確認し合った。

すぐに教頭がマイクを握り、緊急放送を入れる。「今、揺れが収まりました。各学級とも担任の先生の指示に従って、校庭に避難なさい。繰り返します。…」

放送があつて、校内から校庭に向かって駆け出す音が聞こえ始めた。当然、私もすぐに校庭の真ん中に行き、子どもたちを並べ始めた。まず、6年生の子どもたちがしっかりした表情ですぐに整列した。しかし、その後に来る下級生は恐怖に顔を引きつらせ、泣いている子どももかなりいたと思う。

教頭は校庭中央で人員確認の指揮をとっていたし、教務主任はすぐに学校全部を巡視し、けが人や残った子がいないかどうかの確認に走った。

とにかく全員の点呼を行い、いるかどうかの確認を行った。その日、2年生だけは担任が休んでいたため、特別支援学級のY教諭に確認を指示した。

この時点で、20～30人の保護者はすでに校庭に子どもたちを迎えに来ていたと思う。中には、「校長先生、早く帰してくれよ。」という保護者も現れた。

(2) 指示「確認できる子は帰す」

本校の児童は202名である。その子たち全員を動かすのは容易ではない。保護者に託せれば、それに勝る安心もない、とその時は考えた。

そこで、即座に教頭に、「保護者が来たとき確認できた子から、帰してかまわない。速やかに引き渡しをするように。」との指示を担任に伝えさせた。

その直後のことである。山元町教育委員会学務課のS班長が校庭に来られた。大勢の人でごった返す中、私を見つけ、近づいてきてくれた。そして、こう言ったのである。

「教育長からの指示です。まず、児童の安全

確保に最大の力を注いでください。また、学校が避難所になる可能性もあるので、その場合にもよろしくお願ひします。」

とのことであつた。その時点では、私にはどうすると応えることもできなかつたのが正直なところである。

それから数分の間に、かなりの数の子どもたちが迎えに来た保護者と一緒に学校を後にした。しかし、そうしている間にも、私は「津波が来る前に、この子たちを校庭から避難させなければならない。どこにどう避難させるべきか。あの6.2mの防潮堤を超える大きな津波が来たら、校舎も校庭も危険である。」ことなどを考え続けていた。その際、以前に教頭たちと話していた「いざというときは、役場に避難させるしかない。」ということも念頭には浮かんでいたのである。

(3) 決断のきっかけ

その時である。ある一人の男性が、体育館の前で叫んだ。

「あんたたち、何やってんだ。津波がくるんだぞ。」

その声を聞いた瞬間、どうしようかと迷っていた自分の肩をドンと押されたような気がした。

「(保護者への引き渡しを中止し)とにかくすぐに、逃がさなければならない。」ことを決め、直後に、教頭と教職員に指示を出した。

「全員を役場に避難させる。車を出せる先生は出して。すぐ移動を。」

さらに、全員を集めて、

「先頭はA先生、最後尾は教頭先生で。とにかく何があつても、役場まで行くんだぞ。」と指示をした。A教諭も教頭も町内に住所をもつ先生で、町内の地理は熟知している。

すぐに、全校児童と教職員が移動を始めた。しかし、実際に私が出した指示はここまでである。それ以後の動きは、本校の教職員が各自、自らの判断で行つたものだ。

まず、体育館前で教務主任が各担任に指示を出した。「〇〇先生は、車を出して。子どもは小さい子から乗せていくこと。」などを短時間で伝えた。

(4) 指示後の動き

避難のために出した教職員の自家用車は6台。それもワゴン車のような大きなものを優先した。

校門前で、2台のワゴン車に低学年の児童から乗り込み始めた。保護者の車にも同乗させてもらったりしたため、校門付近で30人ほどが乗れたようである。その間にも、歩き始めた子どもたちは、すでに数十m進んでいた。その後は、随時、先生方の車や他の保護者の車が避難した子どもたちの集団に追いつき、子どもたちを乗せていった。中でも、教務主任の車は2度往復して、子どもたちと先生方計15人ほどを運んだようである。

【担任たちの証言】

- ・「車を出せる人」は当然7学年部の先生方で、担任は学級の子どもたちから離れられないと思った。自分の学級はまだ10人以上残っていたので、まず徒歩で避難しようと考え歩き始めた。(その後、同僚教諭の車に乗せてもらい避難)
- ・3年の女子数名と6年女子1名を車に乗せた。子どもを乗せていたので、とにかく役場に少しでも早く到着したいという思いだけだった。
- ・校舎を出てすぐ、左右どちらのコースをとるか迷った。広い通りで役場までまっすぐのコースをとったが、役場にはすぐに上がれず途中下車。最後は徒歩で役場に向かった。

また、途中でPTA会長に会つた教頭は、会長に車を出してくれるよう依頼し、そこでも数人の子どもたちを乗せてもらうことがで

きた。避難のコースは、自家用車を出した先生方でそれぞれ異なる。それぞれが各自の判断で早いと思われるコースを選択し、そこを進んだのであった。

その頃、校長である私は、校門前に残っていた。それは、子どもたちの避難を知らずに学校に子どもを迎えに来る保護者に対応するためである。

次々と学校にやってくる保護者に対して、「子どもたちは役場に避難させました。そちらに向かってください。」と伝え、役場方面に向かってもらった。また、学校に避難してくる地域の方や引き渡し後に再度学校に戻ってきた特別支援学級の母子など数人をも保護者の車に便乗させてもらい、避難させた。

(5) 津波襲来

子どもたちを送り出してから、15分ほどが過ぎた頃だろうか。最後の保護者に「役場です。向かってください。」と言った直後、後ろを振り向いた時のことである。

100mほど先に高さ10mほどの黒い津波が松の大木をなぎ倒しながら迫ってくるのが見えた。校舎の東端から30mほどしか離れていなかったと思う。一瞬、映画の世界か、と思った。しかし、これは現実だった。

何を考える間もなく、私は走り始めていた。そして、校舎の中に駆け込み、西の階段を昇ろうとしたのである。ところが防火扉が閉まっていて、西側には行けない。一瞬迷ったが、すぐに東側の階段に向かい（津波の方に向かうことになったのだが）、中央の階段を駆け上った。その間、たぶん十数秒であろう。

2階に上がって外を見たときには、学校の周りがすでに海のような状態になっていた。正に危機一髪であった。

ほっとしたのもつかの間。もし、第2波、第3波がきたらどうすればよいか、という不安がよぎった。1階は天井付近まで水に浸かっている。これ以上高いところにも上れない。

そこで、船の代わりになりそうなものを2階で探し始めた。しかし、そうそう都合のいいものも見つからないものである。そして、最後に見つけたのが、図書室の本棚だった。木製なので水には浮くはずだと考えた。とりあえず中の本を全部出し、水が流入してきても使えるように窓のそばまで運び出した。

その後は何もできなくなり、そのまま夜になった。自分の命は助かったものの、子どもたちは、先生方は無事逃げる事ができたのか。まさか、逃げる途中で津波にのまれてしまったのではないか。様々な不安を抱えながら、一人教室の中で、寒い夜を過ごしていた。

そんな夜の9時頃だったと思う。突然、私の携帯電話にメールが入った。その時まで、通話もメールもつながらない状態になっていたのだ。

メールはM養護教諭からのものだった。

「校長先生、どこですか？」



それを見て、私はすぐに返信をした。

「学校の2階です。大丈夫です。」と。

本校の児童・保護者そして教職員が逃げたのは、役場隣の中央公民館。そこに、私からのメールが届き、歓声が起きた、との話を後日聞かせてもらった。

その後も、時間をおいてではあるが、何度かメールのやりとりができ、その時避難した子どもたちや先生方も全員無事であることを知ることができたのである。

(6) 再会

一晩、ほとんど寝られずに朝を迎えた。もちろん、学校の周りは流されてきた流木と泥とで、動くこともできない。さらに周りを見



渡すと、学校周辺の景色は一変していた。すぐそばにあったはずのコンビニや八重垣神社はどこにもない。鉄骨などが見えるだけである。校庭の遊具は折れ曲がり、プールには流木が流れ込んでいた。

朝の8時半ごろ、自衛隊のリコプターがこちらに向かって飛んでくるのが見えた。そのヘリに乗せてもらい、被災した学校から助けをもらうことができ、その後、公民館で教頭以下ほとんどの先生方と再会を果たすことができた。その時の喜びは、とても言葉では言い表すことのできないほどのものであった。

3 3月12日以降の動き

(1) 困難を極める児童搜索

その日(3月12日)から、早速児童の搜索を開始した。

11日夜、公民館に泊まったのは61名だが、全校児童202名の安全を確認する必要がある。学級担任ごとグループを組み、手分けをして聞き込みを開始した。電話もメールも役に立たない。車も自転車もないのである。使えるのは自分たちの足だけ。とにかく子どもたちが避難したと思える場所を探し歩いて、情報を集めた。

この日、最終的には、午後5時現在、202名中197名まで確認ができた。

(2) 避難所での対応

3月15日、地震から4日後。この日も搜索は続き、202名中201名までいった。

そのような活動をしながらか、私を含めた教職員には少しずつ明日への不安が広がっていった。今後、学校はどうなるのか。再開するとすれば、どこでどうやって?

そこで、まず山下小学校の校長先生に連絡し、校内の1室を借りて、臨時の山下第二小学校職員室にさせてもらうことをお願いした。その後、多数の避難者がいる山下中学校を訪れて校長先生に会い、避難所運営に本校職員も携わることなどについて相談し、すぐにスタッフとして動き始めることに了承を得た。もちろん、山下中学校の校長先生も喜んで受け入れてくれた。

しかし、そのような中、残念な知らせが届いたのは3月21日だった。最後まで確認できなかった4年生女子児童1名が遺体で発見されたのだ。両親、姉とともに自宅もろとも津波で流され、死亡していたとの警察からの連絡であった。

4 学校再開までの動き

(1) 平成22年度卒業式・終業式

その後、数回の臨時校長会を経て、平成22年度の卒業式及び終業式は、3月23日と決まった。当日は、卒業証書も修了証書もない校長の話だけの簡素な式となった。話の途

中、亡くなった子のことが思い出され、つい言葉に詰まった場面もあったのだが、最後に子どもたちに「卒業証書や通信票は、いつか必ず渡します。」ということ約束し、話を終えた。

(2) 再開場所の選択、決定

学校再開の場所、やり方等を決めていくのも容易ではなかった。山下小学校の校長先生との間で話し合いをもち、山下小学校の教室及び特別教室を開けてもらって授業再開する案を作成した。2校が互いに譲歩した内容となった。また、1日の時程なども同一校舎であれば、当然同じものとならざるを得ない。それらについても、一つ一つ詰めていき、最終結論を教育長に報告できたのは、3月31日の夕方のことであった。

そして、4月25日に始業式、26日に入学式を山下中学校視聴覚室を借りて実施した。最初は、校長室や職員室の机もなく、電話もままならないような状況でのスタートだったが、教職員も子どもたちも少しずつ日常を取り戻していった。

その間、実に様々な組織、団体からの数多くの支援があり、それらに助けられたことは言うまでもない。

6 終わりに

今回の大震災で、本校の場合、避難の方法として自家用車を使うことを選択した。その選択は、結果的に本校児童のほぼ全員の命を救うことはできたのだが、今になって思えば幸運に恵まれたというほかない。

もし、津波がもっと早く到達していたら、などを考えれば、数多くの命が失われた可能性は否定できない。だからこそ、我々の避難についても改善点を明確にし、今後の安全対策につなげていく必要があると考える。

今後、同様の地震・津波が起きたという想定をしたとき、私たちが考えておかなければ

ならない点を整理すると、次の5点に集約できそうに思う。

- ①常に最悪を想定した、地震津波想定避難マニュアルを作成し、役割を教職員の間で十分に確認した上で共通理解を図る(避難場所、避難方法については状況に応じて複数用意する)
- ②避難訓練の際、持ち出せる装備(防災頭巾等)・服装などについてもマニュアルに明記し、それらを用いた訓練を実施する
- ③町教委との協議により、連絡体制の確立を図ると同時に、保護者への連絡方法についても確実な周知を図る
- ④情報入手の手段を複数用意する
- ⑤危機の際には、管理職はもちろん、教職員そして児童生徒までを含めて、自分で行動できる判断力を身につけられるような防災教育を推進する

もちろんこれ以前に、避難に備えて地震・津波に対応できる施設・設備の充実を図ることや町をあげての避難路の整備等を進めることは言うまでもない。

そして、私たちの責務として、今回あった出来事について、しっかり語り継いでいくことと同時にこれからの危機管理に今回の事例を十分に生かしていきたいと考える。それにより、今後起こるかもしれない災害に対して、最低限の被害に押さえられるよう、最善の努力をし続けていきたいと思う。

現在も、学校では大なり小なりの課題は山積している。しかし、地域や保護者の方々とも手を携えながら、子どもたちとともに前を向いて進んでいこうとしている毎日である。